Dalian, March.3－7, 2007

千原　かや乃

3 月 3 日から 7 日にかけて、大連理工大学でのワークショップに参加するため大連に行ってきた。昨年 3 月にも同様の目的で出掛けているのでこれが 2 度目の訪問となる。大連の町並みや理工大の諸先生方との再会は嬉しく懐かしいものであった。研究活動を通して故郷をもてたようで感謝と喜びで一杯になる。

さて今回のテーマは” Knowledge Integration and Innovation”。第 1 日目は JAIST 陣の発表、2 日目に理工大陣の発表。その後各々の発表内容から 2 グループに分かれてのディスカッションとなった。それぞれの立場からイノベーションやそれに関連する研究の議論がなされ、昨年に引き続き有意義な時間を持つことができた。

ところで、今回大連ではワークショップにもまして強烈に印象に残る思い出ができた。ワークショップの前日、大連は何十年ぶりという悪天候に見舞われた。出掛けた我々が馬鹿なのか。帰りたくても帰れない。帰るタクシーはつかまらず。生まれて初めて風で飛ばされるということを経験。木にしがみつく。「暴風・暴風・雪・凍結」。ようやくたどり着いたホテルは「停電・停水・停ガス状態」。それはつまり「停トイレ・停ご飯・停暖房」を意味する。しかも外の気温は氷点下。圧巻だった。「パンパカパーン・the お手上げ]である。何にせよホテル内は真っ暗なのである。非常灯も蝋燭もなく、携帯電話の灯りがぼやりと光る。そんな中で一夜を過ごした中森研究室の有志たち。まさしく文明の有り難さに気付けた時間であり、明日のワークショップの中止を憂いた時間であり、疑似サバイバルを謳歌した時間であった。

その翌日、決行されたワークショップが上に書いた内容である。苦境を乗り越え学問的成長を目指した我々に万歳。そして今回も食事に招いてくださり、中国の家庭の温かさを教えてくれた Yan さんのご両親に万歳。最後にそんな悪天候の中でも正月を祝うための打ち上げ花火と爆竹を盛大に打ち上げまくっていた大連の心意気に心から万歳である。